

貯法：室温保存
有効期間：3年

アリルアミン系抗真菌剤
日本薬局方 テルビナフィン塩酸塩クリーム
ラミシール[®]クリーム1%
Lamisil[®] Cream 1%

承認番号	21900AMX00711000
販売開始	1993年9月

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	ラミシールクリーム 1%
有効成分	1g 中 日局 テルビナフィン塩酸塩 10mg
添加剤	セタノール、ステアリルアルコール、パルミチン酸セチル、ミリスチン酸イソプロピル、ステアリン酸ソルビタン、ポリソルベート 60、ベンジルアルコール、水酸化ナトリウム

3.2 製剤の性状

販売名	ラミシールクリーム 1%
性状	白色で、わずかに特異なおいがある。

4. 効能又は効果

下記の皮膚真菌症の治療

- 白癬：足白癬、体部白癬、股部白癬
- 皮膚カンジダ症：指間びらん症、間擦疹（乳児寄生菌性紅斑を含む）
- 癬風

6. 用法及び用量

1日1回患部に塗布する。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ使用すること。

9.7 小児等

低出生体重児又は新生児を対象とした臨床試験は実施していない。

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.2 その他の副作用

	0.1%～5%未満	0.1%未満	頻度不明
過敏症	そう痒症、紅斑	—	発疹、蕁麻疹、血管浮腫
適用部位	接触皮膚炎、発赤、刺激感	鱗屑、落屑、皮膚亀裂	湿疹、皮膚乾燥、疼痛、色素沈着、皮膚灼熱感

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

眼科用として角膜、結膜には使用しないよう指導すること。誤って眼に入った場合は、刺激症状があらわれることがあるので、流水で十分に目をすすぐよう指導すること。

15. その他の注意

15.2 非臨床試験に基づく情報

動物実験（モルモット）において、本剤に弱い光毒性が認められている。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

健康成人背部にテルビナフィン塩酸塩 1% クリームを塗布し、24 時間にわたって血漿中濃度を測定したところ、いずれの測定時点においても検出限界（1ng/mL）以下であった。

16.2 吸収

健康成人背部にテルビナフィン塩酸塩 1% クリームを塗布し、24 時間にわたって血漿中濃度を測定した結果、薬剤の回収率から推定される吸収率は約 5% であった。

16.8 その他

16.8.1 ケラチンへの吸着性

角質層の主要構成成分であるヒトケラチンへのテルビナフィン塩酸塩の吸着性を検討したところ、73～98%の吸着率が得られた。一方、一旦ケラチンに吸着された本剤は、緩衝液で洗浄することにより遊離され、ほぼ 100%の薬剤活性が回収されたことから、ケラチンが本剤の貯蔵器として活性型薬剤の濃度維持に役立っていると考えられる¹⁾ (*in vitro*)。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

17.1.1 国内第Ⅱ相試験

白癬（足部白癬、体部白癬、股部白癬）患者 33 例（解析対象例数）を対象に本剤 1 日 1 回塗布による有効性及び安全性を検討した結果、有効率（「有効」以上）は足部白癬 81.8%、体部白癬 91.7%、股部白癬 90.0% であった。本剤塗布による副作用は認められなかった²⁾。

17.1.2 国内第Ⅱ相試験

白癬（足部白癬（手部白癬を含む）、体部白癬、股部白癬）、カンジダ症（指間びらん症、間擦疹（乳児寄生菌性紅斑を含む）及び癬風患者 315 例（1 日 1 回塗布群 148 例、2 回塗布群 167 例）を対象に実施した二重盲検比較試験において、本剤を 1 日 1 回塗布又は 1 日 2 回塗布³⁾による有効性及び安全性を検討した結果、有効率（「有効」以上）は足部白癬で 1 日 1 回塗布群は 72.2%、2 回塗布群 78.4%、体部白癬は 1 日 1 回塗布群 75.0%、2 回塗布群 82.6%、股部白癬は 1 日 1 回塗布群 88.9%、2 回塗布群 87.5%、カンジダ症は指間びらん症で 1 回塗布群 60.0%、2 回塗布群 81.8%、間擦疹（乳児寄生菌性紅斑を含む）は 1 回塗布群 89.7%、2 回塗布群 88.2%、癬風は 1 回塗布群 93.3%、2 回塗布群 86.5% であった。いずれも両群間に有意差は認められなかった。

副作用発現率は、1 回塗布群で 2.7%（4/148 例）、2 回塗布群で 3.6%（6/167 例）であり、副作用は、1 回塗布群で掻痒・発赤の悪化 1.4%（2/148 例）、発赤の悪化及び接触皮膚炎が各 0.7%（1/148 例）、2 回塗布群で接触皮膚炎 1.2%（2/167 例）、掻痒の悪化、発赤、水疱の悪化、紅斑、刺激感が各 0.6%（1/167 例）であった³⁾。

注）本剤の承認された用法・用量は、「1 日 1 回患部に塗布する」である。

17.1.3 国内第Ⅲ相試験

白癬（足部白癬（手部白癬を含む）、体部白癬、股部白癬）、カンジダ症（指間びらん症）、間擦疹（乳児寄生菌性紅斑を含む）及び癬風患者 544 例（本剤群 265 例、ピフオナゾール群 279 例）を対象に、ピフオナゾール 1% クリームを対照薬に本剤 1 日 1 回塗布による有効性及び安全性を検討するため二重盲検比較試験を実施した結果、有効率（「有効」以上）は足部白癬で本剤群 73.2%、ピフオナゾール群 74.2%、体部白癬は本剤群 81.6%、ピフオナゾール群 77.3%、股部白癬は本剤

群 92.1%、ピフオナゾール群 74.3%、カンジダ症は指間びらん症で本剤群 85.7%、ピフオナゾール群 90.5%、間擦疹（乳児寄生菌性紅斑を含む）は本剤群 94.9%、ピフオナゾール群 80.0%、癬風は本剤群 80.6%、ピフオナゾール群 84.6%であった。本剤群の副作用発現率は、1.1%（3/265 例）であり、副作用は、発赤の悪化、搔痒感及び刺激が各 0.4%（1/265 例）であった⁴⁾。

17.1.4 国内一般臨床試験

白癬（足部白癬（手部白癬を含む）、体部白癬、股部白癬）、カンジダ症（指間びらん症）、間擦疹（乳児寄生菌性紅斑を含む）及び癬風患者 176 例を対象に、本剤 1 日 1 回最長 7 週間塗布による有効性及び安全性について検討した結果、本剤の有効率（「有効」以上）は足部白癬（手部白癬を含む）75.8%、体部白癬 96.3%、股部白癬 93.8%、カンジダ症では指間びらん症 100%、間擦疹（乳児寄生菌性紅斑を含む）87.5%、癬風 90.9%であり、いずれの疾患においても本剤の高い菌陰性化率と有効率が認められた。副作用発現率は、1.9%（3/176 例）であり、副作用は、接触皮膚炎 1.9%（3/176 例）であった⁵⁾⁻⁷⁾。

17.3 その他

健康成人の無傷背部皮膚表面にテルビナフィン塩酸塩 1%クリーム及び基剤を用いたパッチテスト並びに光パッチテストの結果では、皮膚刺激性は認められていない^{8),9)}。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

テルビナフィン塩酸塩は真菌細胞内のスクアレノエポキシダラーゼを選択的に阻害し、スクアレノの蓄積並びにエルゴステロール含量の低下をもたらす抗真菌作用を示す^{10),11)}。皮膚糸状菌に対しては低濃度で細胞膜構造を破壊し、殺真菌的に作用する^{11),12)}。また、*C. albicans* に対しては低濃度から部分的発育阻止効果を示し、高濃度では直接的細胞膜障害作用により抗真菌活性をあらわす¹³⁾。

18.2 抗真菌作用

18.2.1 テルビナフィン塩酸塩は広い抗真菌スペクトルをもち、皮膚糸状菌（トリコフィトン属、ミクロスポルム属、エピデルモフィトン属）、カンジダ属及び癬風菌（*Malassezia furfur*）に対して優れた抗真菌活性が認められている¹⁴⁾⁻¹⁶⁾（*in vitro*）。

18.2.2 テルビナフィン塩酸塩は皮膚糸状菌（*T. rubrum*、*T. mentagrophytes*）に対して 0.001~0.01 $\mu\text{g}/\text{mL}$ の最小発育阻止濃度（MIC）を示す¹⁷⁾。また、*T. mentagrophytes* 発芽分生子に対し低濃度で明らかな殺真菌作用を示す¹⁵⁾（*in vitro*）。

18.2.3 テルビナフィン塩酸塩は *C. albicans* に対して 0.098 $\mu\text{g}/\text{mL}$ 以上の濃度で酵母形から菌糸形への変換を阻止し¹⁸⁾、1 $\mu\text{g}/\text{mL}$ 以上の濃度では酵母形増殖に対し静真菌作用を示す¹³⁾（*in vitro*）。

18.3 実験的白癬に対する作用

モルモットの *T. mentagrophytes* 感染に対しテルビナフィン塩酸塩 1%外用剤 1 日 1 回塗布により、治療開始 4 日目には明らかな症状の改善がみられ、2 週間後には優れた真菌学的治療効果が認められている¹⁹⁾。また、テルビナフィン塩酸塩 1%外用剤を *T. mentagrophytes* 接種 1~3 日前に局所に単回塗布した場合、感染後 14 日間経過する期間を通して発症は全くみられなかったことから、薬効の持続性が示された。これはテルビナフィン塩酸塩の良好な皮膚貯留性に基づくものと考えられる²⁰⁾。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般的名称：テルビナフィン塩酸塩（Terbinafine Hydrochloride）

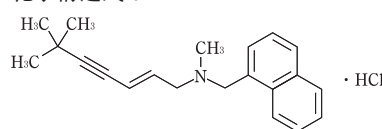
化学名：(2*E*)-*N*,6,6-Trimethyl-*N'*-(naphthalen-1-ylmethyl) hept-2-en-4-yn-1-amine monohydrochloride

分子式：C₂₁H₂₅N · HCl

分子量：327.89

性状：白色～微黄白色の結晶性の粉末である。
メタノール、エタノール（99.5）又は酢酸（100）に溶けやすく、水に溶けにくい。
1.0g を水 1000mL に溶かした液の pH は 3.5~4.5 である。

化学構造式：



融点：約 205°C（分解）

分配係数：7.4（1-オクタノール/水）

22. 包装

チューブ：10g×10 本、10g×50 本

23. 主要文献

- 1) 内田勝久ほか：日本医真菌学会雑誌．1993；34（2）：207-212
- 2) 香川三郎ほか：西日本皮膚科．1991；53（5）：1033-1037
- 3) 福代良一ほか：西日本皮膚科．1991；53（4）：785-806
- 4) 富澤淳儀：新薬と臨床．1991；40（4）：740-752
- 5) 黒沢伝枝ほか：新薬と臨床．1991；40（5）：954-960
- 6) 岡部省吾ほか：新薬と臨床．1991；40（4）：733-739
- 7) 山田裕道ほか：皮膚科紀要．1991；86（2）：235-243
- 8) 中山秀夫ほか：西日本皮膚科．1991；53（5）：1043-1053
- 9) 大畑恵之ほか：西日本皮膚科．1991；53（5）：1038-1042
- 10) Ryder, N. S. : Antimicrob. Agents Chemother. 1985；27（2）：252-256
- 11) Ryder, N. S. : Clin. Exp. Dermatol. 1989；14（2）：98-100
- 12) 西山彌生ほか：日本医真菌学会雑誌．1991；32（2）：165-175
- 13) 平谷民雄ほか：日本医真菌学会雑誌．1992；33（1）：9-18
- 14) Petranyi, G. et al. : Antimicrob. Agents Chemother. 1987；31（9）：1365-1368
- 15) 平谷民雄ほか：日本医真菌学会雑誌．1991；32（4）：323-332
- 16) 内田勝久ほか：日本医真菌学会雑誌．1991；32（4）：343-346
- 17) Schuster, I. et al. : "Preclinical characteristics of allylamines." ; in Berg, D. et al. eds. Sterol Biosynthesis Inhibitors : Pharmaceutical and Agrochemical Aspects. : Pbl. : Ellis Horwood Ltd., Chichester (UK) PP. 1988 ; 449-470
- 18) Schaudé, M. et al. : Mykosen. 1987；30（6）：281-287
- 19) 内田勝久ほか：日本医真菌学会雑誌．1991；32（4）：333-342
- 20) 内田勝久ほか：日本医真菌学会雑誌．1993；34（2）：199-206

* 24. 文献請求先及び問い合わせ先

サンファーマ株式会社 くすり相談センター
〒105-0011 東京都港区芝公園 1-7-6
受付時間：9 時～17 時
（土、日、祝日、その他当社の休業日を除く）
TEL：0120-22-6880
ホームページ：https://jp.sunpharma.com/

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

 **サンファーマ株式会社**
東京都港区芝公園 1-7-6

(05)